

## 外傷サーベイランス委員会会議録

会議体の名称	第13回外傷サーベイランス委員会
事務局(担当課)	セーフコミュニティ推進室
開催日時	2016年7月14日(木) 10時20分～11時50分
開催場所	本庁舎8階 教育委員会室
議事	<p>1 外傷サーベイランス委員会について</p> <p>(1)委員委嘱、委員紹介</p> <p>(2)委員長の選任について</p> <p>2 学校の安全について</p> <p>・学校の安全対策委員会</p> <p>3 児童虐待の防止について</p> <p>・児童虐待の防止対策委員会</p> <p>4 その他</p>
出席者	<p>1 豊島区セーフコミュニティ推進協議会専門委員 市川 政雄</p> <p>2 豊島区セーフコミュニティ推進協議会専門委員 富尾 淳</p> <p>3 日本セーフコミュニティ推進機構専務理事 今井 久人</p> <p>4 池袋警察署生活安全課長 戸松 弘治郎</p> <p>5 豊島消防署救急係長 梁田 宣明</p> <p>7 豊島区池袋保健所長 原田 美江子</p> <p>8 豊島区政策経営部長 城山 佳胤</p> <p>6 豊島区セーフコミュニティ推進室長 松崎 恵</p> <p>7 豊島区指導課長 加藤 勲</p> <p>8 豊島区朋有小学校長 西村 浩</p> <p>9 豊島区子育て支援課長 猪飼 敏夫</p> <p>10 豊島区地域区民ひろば課長 八巻 規子</p>
配布資料	<p>資料1 豊島区外傷サーベイランス委員会 委員名簿</p> <p>資料2-1、2-2 学校の安全対策委員会</p> <p>資料3 児童虐待の防止対策委員会</p> <p>参考資料 第11回外傷サーベイランス委員会 会議録</p>
議事要旨	<p><b>議事1</b></p> <p>(朋有小学校西村校長より説明)</p> <p>専門委員:成果指標よりけがが減ってきていることが顕著だが、それは何らかの取り組みの成果なのか。</p>

	<p>説明者:セーフスクールの認証を目指すことで、子どもたちが問題意識を持つようになった。4月ないし5月にセーフスクール委員会を開催し、子どもたちがタブレットを持って校内の危険場所の写真を撮り、その場所について話し合いをしている。</p> <p>専門委員:そのような活動により、子どもたちの遊び方や体育の授業の仕方に変化はあったのか。</p> <p>説明者:例えば、鬼ごっこを見ている、子どもたちは周りを見ながら遊んでおり、けがが起きないように注意している。体育の授業は安全第一なので、教員がまずはしっかりと指導を行わなければならず、安全チェックリストに沿った指導を行っている。</p> <p>専門委員:どんなけがが多いのか。全体的には減ってきているのか。</p> <p>説明者:打撲が多い。全体的にけがの件数は減ってきている。</p> <p>専門委員:成果指標において自己評価が下がっているが、これは自分に厳しくなっているということなのか。</p> <p>説明者:そういう見方はできる。今までは自己評価のみだったが、昨年度から友達からの見た目として他者評価を取り入れている。この差が縮まってくれば、数値の正確さが増してくると思われる。</p> <p>専門委員:この取り組みは大人の職場の安全並みの取り組みだと思われるが、学年別及び男女別のけがの状況について訊きたい。</p> <p>説明者:低学年が比較的多く、高学年は少ない。男女別では、男子の方が多い。</p> <p>専門委員:つまりはセーフスクールの取り組みの蓄積が、けがの減少につながっているのかと思われる。そのようなデータがあると良い。</p> <p>専門委員:「自転車のヘルメット着用率」は、どのように算定しているのか。</p> <p>説明者:ヘルメットを所持している子どものうち何人が着用しているかを算定している。</p>
--	---

	<p>専門委員：指標の数値からみると、4割の子どもがヘルメットを持っているものの着用はしないということなのか。</p> <p>説明者：高学年になると、ヘルメットの着用を恥ずかしく感じたり、低学年時に購入したヘルメットのためサイズが合わなくなった、などの理由で着用しない子どもが増えている。ヘルメットを着用することが文化として学区域に定着すれば、着用する子どもも増えるはずだと考えている。</p> <p>専門委員：この指標の数値を算出する上での分母について知りたい。</p> <p>説明者：分母は、自転車を所持している子どもの数である。この指標も、数値がだいぶ高くなってきている。これは自己評価による数値となっているので、今後は保護者を対象に訊いてみたいと考えている。</p> <p>委員：先日、セーフスクールの地域対策委員会があり、交通対策課長から、朋有小学校は区内でも先進的に交通安全に取り組んでいるとの報告があった。</p> <p>学校の安全は、「校内の安全」と「地域にある学校としての安全」という2本立てで取り組んでいる。また朋有小学校は、PTAが非常に協力的である。</p> <p>説明者：本校は学区域が非常に広いが、PTAが中心となって、第1回目の認証取得の際は通学路における交通安全、第2回の認証取得の際は不審者対策、そして今年度は防災をテーマにマップの作成を行っている。</p> <p>専門委員：児童自らがタブレットを持って学校の危険箇所を把握しているということだが、区内の学校全てでそうなのか。</p> <p>説明者：基本的にセーフスクール活動に取り組んでいる学校では、そのようにしている。</p> <p>専門委員：よその学校でそれほど事故が減っていなければ、セーフスクールのそういった取り組みの効果によることがわかるので、朋有小学校だけでなく可能であればよその学校でのけがの発生件数の動向を見せてもらえば、取り組みの効果がより説得力を持って示せるのではないかと思います。何らかの形でデータが取れると良い。</p>
--	---

	<p>委員：区民ひろばについて説明する。現在、区民ひろばは全小学校区域にあり22か所全てに設置が終了している。赤ちゃんからお年寄りまで幅広い世代に利用されている施設であり、セーフコミュニティ・セーフスクールを地域の人々に周知する役割を担っている。</p> <p>学校を出ると子どもたちに対し教員の目が行き届かなくなるが、ヘルメットを着用していない姿を見かけたら声をかけるなど、地域の中で無数の目で子どもたちを見守り、学校と連携して取り組んでいる。</p> <p>専門委員：再認証に向けての見せ方として、学校の安全は朋有小だけでなく今は6校に広がっている。「現在インターナショナルセーフスクールに取り組んでいる学校は何校である」という報告があると、学校の安全が広がっているように見えて良い。</p> <p>委員：年間活動レポートでは、その旨を示している。</p> <p>専門委員：学校を出た後の児童への対策について訊きたい。</p> <p>説明者：本校は敷地内に「子どもスキップ」があり、多くの子どもが利用している。放課後の遊びなどでは、本校の低学年担任の教諭とスキップの職員が連携して対応している。</p> <p>専門委員：「子どもスキップ」では、けがは減っているのか。</p> <p>説明者：本校では数値を取っていないが、減っていると感じる。</p> <p>委員：「子どもスキップ」については子ども課が所管となっており、そちらでデータを収集していると考えられるので、確認する。</p> <p>専門委員：子どもが校内で危険箇所を指摘した場合、修理等の予算措置はどのようにするのか。</p> <p>説明者：用務員が修理したり、用務員で対応出来ないものは学校施設課に依頼している。</p> <p>専門委員：危険箇所をまとめたリストがあると良い。</p> <p>説明者：すぐ修理できるものは修理するなど、校内にリストを貼ってわかるようにしている。</p>
--	--

## 議事 2

(子育て支援課長より説明)

専門委員: 一人親世帯が年々増加しているようだが、状況をおしえてほしい。

説明者: 豊島区内の一人親世帯数は把握できないが、一人親を対象にした児童扶養手当の件数の推移からみると、微増である。

専門委員: 一人親世帯は増えていないけど、児童虐待通告については少し増えてきている状況ということなのか。

説明者: 通常は虐待の通告は身体的虐待が多いが、ひとり親家庭についてはネグレクトが最も多い。色々と状況はあるが、夜遅くまで働いて、子どもを一人にしてしまう時間が長くなってしまふことが要因なのではと思われる。

専門委員: 「外部通告により第三者が気付く」パターンと「個人が相談する」パターンの割合はわかるか。

説明者: 割合の詳細は把握していないが、近隣や保護者・児童自身が相談するケースも増えてきている。最も多いのは、子どもが所属する機関やその他の関係機関からの相談・通告になる。通告経路によって傾向が違ってくる。医療機関だと、怪我や火傷等で受診した子どもに虐待の疑いがあるという通告や、虐待とは判断されないがとりあえず知らせておくということも多い。子育て支援課及び子ども家庭支援センターであれば専門の係があり、そこにつないでいる。

委員: 新規相談・通告経路について、保育園からの件数が非常に少ないと思われる。私立保育園からの件数を含まないのか、同じ子ども家庭部内ということで件数をカウントしないケースがあるのか。

説明者: 保育園については私立も公立も含めている。保育園から区に報告を入れてもらっているが、既に虐待があるとわかっていて保育園に入園しているケースがけっこうあるので、新規の件数が少ない状況となっている。

委員: 小学校・中学校からも虐待の通告があると思うが、学校としては、虐待にどのような傾向があると感じるか。

	<p>委員:家庭に問題があれば、本校であれば東部子ども家庭支援センターに相談し、そこから児童相談所へつないでもらっている。昨年、本校からも1件児童相談所へ相談に行ったケースがある。児童民生委員にも家庭の事情を聞いたりもしている。なお、少し不登校気味なケースの場合は、担任が自宅に行くが、親が夜働いている場合は、家庭支援センターに定期的に見てもらおうようお願いをしている。</p> <p>専門委員:児童虐待の現状について、その傾向を見ていると数年前に少し良くなりかけていたのが、この2～3年で急に悪くなっている雰囲気が見られるがその実感について聞きたい。</p> <p>説明者:実感としては、重篤化しているものが多くなってきた。2014年度はかなり厳しい状況であった。精神疾患を抱えている親御さんについては対応が難しく、どうしようもない場合は、児童相談所にまわることもある。</p> <p>専門委員:対策が非常に難しいと思われるが、「このケースはこれでうまくいった」といったベストプラクティスになるものがあれば解決の糸口になると思われるが、どうか。</p> <p>説明者:個々の事情によって様々であるので、職員の経験値を上げるしかない。チームを組んで情報共有し、事例を積み上げていく必要があると考えている。</p> <p>専門委員:金沢市や横須賀市などへ児童相談所の視察に行っているが、区の改善すべきところについて聞きたい。</p> <p>説明者:現在、東京都と特別区で児童相談所の移管の件で協議を進めている。中核市は児童福祉法改正前より児童相談所を設置可能だが、47ある中核市のうち金沢市と横須賀市の2市のみが、市として児童相談所を設置している。</p> <p>東京都も頑張っているが、マンパワーが不足しており迅速な対応が困難になっていること、区との見解の相違があり、特別区各区で児童相談所を設置すべきとして協議している。本年5月に児童福祉法が改正されたため、金沢市と横須賀市に対し、県とどのようなやりとりをしたかを確認している。また、本来なら児童相談所が実施すべきことを区が代わりに行っているという状況もある。児童相談所が区へ移管されれば、虐待への対応状況が改善されると思われる。</p>
--	---

	<p>委員:ひとり親家族等への学習支援のうち、訪問型の学習支援について訊きたい。当制度について区から情報を発信しているのか。</p> <p>説明者:定員 10 名なので、支援者が家庭に入らないと危うい子どもなどに限定して実施している。親御さんの承諾も必要としているので東部子ども家庭支援センターに問い合わせをお願いしたい。</p> <p>専門委員:学習ボランティアとはどのような方々なのか。</p> <p>説明者:NPOに委託しており、登録している学生に来てもらっている。学力支援としているが、生活習慣の改善に重きを置いており、福祉的要素で対応している。</p> <p>委員:警察における虐待の対応としては、人身安全関連事案として対応している。家庭内の弱者の危害防止・救済として広がっている。児童虐待での通告が増えているが、児童虐待に対する社会の捉え方も非常に敏感となっており、例えば大きな声を出している親御さんの声を聞いて近所から 110 番の通報が入るケースも多々ある。</p> <p>虐待を行う者は、自らを制御することが難しい人が多いと感じている。虐待を行う者にも権利があり、権利と義務の間でどのように弱者を救済するかが課題である。</p> <p>委員:消防としては、救急の面で携わっており、それが目的である。現場において、虐待かどうかを判断することは難しい。</p> <p>医療機関などと連携を取りながら対応していきたい。</p>
--	---